

教誨師だより

第13号

令和5年
3月20日発行

『宗教教誨師として』

加藤 幹夫



宗教教誨師として、罪を犯した人々と関わる中で、「この人が再び罪を犯すことがないように」と願いつつ、奉仕をさせていただいています。特に、三重刑務所は、初犯や犯罪傾向の進んでいない「A指標」と呼ばれる施設なので、再犯防止には力を入れていることから、そう願っています。

再犯防止には、罪の償い、罪の自覚、懺悔などの教育的指導が必要でしょう。罪を犯してしまう人の多くは、自分の人生の中で、心の傷を負い、孤独を味わい、心に歪みを持つ

ています。このために近年、心理療法やカウンセリング、依存症改善プログラムも組み込まれています。

私が教誨師となった二五年前は「刑務所」といえば、懲罰を与える場所というイメージが強く、教育はあまり積極的ではなかったように感じましたが、昨年の刑法改正で、「懲役刑」と「禁固刑」が一本化され、数年内に新たな「拘禁刑」が施行され、より再犯防止教育の重要性が高まってきました。

このような動きの中で、宗教教誨師の働き、その役割を、あらためて考えさせられています。三重刑務所での奉仕は、主に、学校の授業のような集団教誨、グループでの宗教座談会があります。集団教誨では、講義形式なので一方通行になっていきましたが、近年、感想文を書いてくれるようになったので、少しは反応がわかるようになりました。座談会は会話できるので、より相手の気持ちが変わりますし、なんと行って個人教誨が相手の気持ちが一層、よくわかります。

ある日、「自分の親が亡くなったので、祈って欲しい」という個人教誨の願薦を受けました。今、思い返せば、これこそ、宗教教誨だけが担うことのできる奉仕ではないかと思っただけです。

「祈り」は、人だけが持っている特質でありましょう。誰から教えられるわけがなく、わたしたちは、生まれつき「祈り」を身につけています。「困ったときの神頼み」とはよく言いますが、確かに、「祈り」は、何かを願う時に、永遠なる存在に目を向け、本能的に口から出てきます。私は、キリスト教の牧師なので、聖書からその意味を考えます。聖書の一番はじめには、神さまが人を創造された出来事が書かれています。神さまは、さまざまなきを創造されますが、人だけには特別な創造をされました。それは、人を造られる時に、「神の息を吹き入れた」と記されているのです。ここから、人は神さまと対話する存在となりました。

神さまは絶対的に正しい方なので、人は常に神さまと対話しながら、何が正しいのかを思い巡らしてゆきます。もし、そうしなければ、動物のように本能で生きるだけになってしまいます。すると、「祈り」は単に、願っただけでなく、「こんな人生を

送っていてはいけない」という悔い改めや、今、自分が生かされていることへの感謝、永遠を思い巡らす心や平安、永遠に支えてくださっている存在への賛美が生まれてきます。

教誨師はカウンセリング的な役割も担っていると思いますが、より人間存在の奥深いところ、永遠との対話の中で、「祈り」という永遠とつながるところで、共に感謝と賛美を味わうこと、それは教誨師だけが持っている奉仕ではないかと思っっています。ただ、現実的には、なかなかうまくいきません。人間の価値観や生き方を変えることはむずかしいのです。相手が変わったと喜んでいたら、裏切られ、がっくりすること、幾度となくあります。ただ、その自分の無力さの中で、この奉仕が無駄ではないことを思います。それは、私自身もまた神さまに支えられている喜びを味わっているからです。



日本基督教団阿漕教会